

早稲田大学におけるバスケットボール競技者の継続決定要因と目標志向性に関する研究

Reserch on Moive of sports organization continuance and
Target intentionality of Basketball Player in Waseda universuty

1K07B184-1

指導教員 主査 木村 和彦先生

藤原 駿介

副査 倉石 平先生

【緒言】

近年、生涯スポーツや健康スポーツ等が世間の脚光を浴びる中、学校スポーツの衰退が懸念されるようになった。中学、高校での運動部活動においては生徒数、運動部員数、運動部数が共に減少傾向にあり、部活を受けもつ教員の高齢化も進んでいる。この傾向は今後もさらに続くものと予想される。また大学生の運動部活動への加入状況は（加入率）は19.4%と中学（65.4%）、高校（50.9%）に比べて圧倒的に低く、競技団体への加入状況も大学生は全体の2.8%と非常に低い数値となっている（笹川スポーツ財団、2000）。大学生のスポーツ組織への参加および継続動機は年々多様化しており、これまでのスポーツに対しての価値基準では測りきれない複雑な様相となっている。またスポーツ振興の面から見ても、大学生時代の充実したスポーツ経験が以後のスポーツ観に大きく影響すると考えられるため、今後のバスケットボール界の発展・成長においても早稲田大学の学生のバスケットボール団体への参加および競技継続動機に関して検討することは非常に重要であると考えられる。本研究はこうした考え方に基づき、特に競技志向の同好会への所属者が部活動へ加入しなかった理由を明らかにするとともに、バスケットボール競技者の継続動機と目標志向性に焦点を当てることを中心とし、これらの関係を明らかにすることによって部活動および同好会・サークルの指導や運営をよりよいものにするための課題を示唆することを目的としている。

【方法】

早稲田大学でバスケットボール競技を行っている学生 97 名を対象として調査を行った。なお調査対象は「A・バスケット部（または部活生）全 28 名」「B・競技志向の同好会（以下同好会）45 名」「C・イベント志向のサークル（以下サークル）24 名」と 3 つに分類した。「1 基本属性」「2 バスケットボールを継続する上で重要視する要因に関する質問」「3 部活動または同好会への加入決定要因に関する質問」「4 高校時代の部活動に関する質問」「5（同好会・サークルの方のみ）部活動非選択理由に関する質問」「6（部活動の方のみ）部活動の練習における満足度に関する質問」の計 6 項目 68 問の質問紙調査を行った。

【結果】

所属団体への加入決定要因の所属団体別平均からみる全体的傾向については仮説としていた「部活生と同好会では『社会的有用性』『達成』『成長』『環境』の因子が高く、対してサークルでは『親和』『自由平等』『健康体力』の因子が高い数値を出す」は実証されなかった。特に同好会に関しては加入決定要因に関しては『親和』『自由平等』『健康体力』を重要視し、サークルに近い考え方をもって同好会に加入していたことが分かった。しかし『環境』や『成長』などの「バスケットボールおよびスポーツの体験（経験）やそれによる能力の向上に必要なこと」に関する項目が低かったサークルに対し、同好会は『環境』『成長』の因子に関する項目では平均よりも高い値であったことから、必ずしも競技継続に関して同じ考えを持っているとはいえないことも分かった。

【考察】

今回の研究で明らかになった競技継続に関する様々な結果は非常に複雑であるが、バスケット部と同好会・サークルそれぞれに所属する者の特徴を顕著に表わす結果となったと考えられる。特に競技志向の同好会所属者はバスケットボールに対して部活生に近い競技歴・競技意欲を持っているものの、部活動に対しての封建的なイメージや競技継続に対する不安から同好会を選択したという結果が明らかとなった。特に同好会所属者はバスケットボールを続ける上で、より自由かつ平等な練習機会を求めていることも分かった。より個性の発揮しやすい自由な環境や時間を求める学生が多かったことから、今後のチーム運営はより学生同士の意見を出し合う中で練習内容や時間を決めていくことがより充実した練習や結果につながると考えられる。また部活生は現状のチーム運営・練習に対して自身の競技能力の成長や目標の達成を行う場として十分満足しているという結果が表れた。しかし体育会の封建的なイメージがいまだ強く残っていること、また部活生自身も練習環境が平等にあるとは思っていないということも調査の結果分かった。最低限の競技能力とその向上に対して意欲の高い一般学生が入りやすい環境を作ることが、よりバスケット部内に競争を生み、チーム成績をあげることに繋がるのではないかと筆者は考える。